

移動する人々の言語レパートリーと言語的アイデンティティに関する研究ノート —豪州在住日本人の事例—

A Note on Linguistic Repertoire and Linguistic Identity of People in the Move: A Case Study of a Japanese resident in Australia

村岡 英裕(千葉大学)

Hidehiro MURAOKA (Chiba University)

Abstract

The present study is one in a series which investigate how people who move around in the globalized world change their linguistic repertoire according to their experience of contact situations in their immigration destination and the trajectory of language management in such contact situations (e.g. Muraoka 2017; Muraoka 2016; Muraoka & Kurata 2017; Muraoka & Ko 2016). By considering the concept of linguistic identity, this study examines from the viewpoint of determinants of the highest level in Neustupny's 4-tier typological approach. The term linguistic identity has been used in relation to the models of "speech community" (e.g. Gumperz 1964; Hymes 1972) and "one - nation - one - ethnic group - one - language" ideology of nation-state, and the sense of solidarity among minority groups as a rival power. However, as suggested here, it can also be interpreted as a drive which motivates an individual to position as well as to evaluate various language varieties in their linguistic repertoire. It should be correct to assume that the process of accumulated language management in contact situations helps to clarify one's strategies and principles of language behaviour for the participation of contact situations. On the basis of data of one case study of a Japanese residing in Australia, this essay aims to discuss the validity of linguistic identity as one of the determinants for building up such strategies and principles.

キーワード：言語レパートリー，言語的アイデンティティ，類型論的アプローチ，自己評価，英語バラエティ，世界英語

Key words: linguistic repertoire, linguistic identity, typological approach, self-evaluation, Varieties of English, World Englishes

1. はじめに

本稿では、移動する人々の言語レパートリーに関する一連の研究 (e. g. 村岡 2017, 村岡 2016; 村岡・倉田 2017; 村岡・高 2016) で収集している事例の中から、オーストラリアに在住する日本人 1 名を取り上げ、英語のバラエティをどのように自分自身の言語レパートリーの中に位置づけようとしているかをホスト社会の主流言語に対する言語的アイデンティティとして捉える可能性を試論として提出する。

2. 本研究の前提

まずこれまでの一連の研究において前提とした本研究の立場をまとめておく。

移動する人々の言語レパートリーは、ことばの共同体ではなく、彼ら一人一人が独自に経験してきた時空間、そこではグローバルにもローカルにも言語間、言語変種間の序列や象徴的価値がダイナミックに渦巻いていると指摘されているが、そうした時空間において蓄積されている多様な言語資源と見なすことができる(cf. Blommaert 2010).

データ収集をしてきた一連の研究では、そうした蓄積は、通時的に行われてきた言語管理(Neustupny 1994)の軌道によるとする立場に立つ。接触場面において実施されてきた言語管理の蓄積の結果、人々は接触場面に対して一定の言語行動の方針を持つようになり、習慣化していく。例えば、累積評価(フェアブラザー 2002)は、否定的評価が連続することによって評価が強まったり固定化したりすることを指すが、こうした評価の蓄積の結果、言語行動の方針が形成される可能性があるだろう。こうした方針は、個々の接触場面における言語管理と区別して、接触場面向かう言語管理、あるいは習慣化された言語管理と呼ぶことができる(村岡 2010;高 2014;ファン 2015).

通時的な言語管理の蓄積の結果としての接触場面向かう管理は、個人の言語レパートリーの変容を促す。多言語社会が成立し、移民のコミュニティが発達した国々と異なり、日本のような社会においては移動する人々の言語レパートリーの変容は、彼らの生成する言語バリエーションがまだ安定していないと思われるためにそうした言語プロダクトを収集するだけでは、明らかに出来ないと考えられるⁱⁱ。そのため、一連の研究では、移動する人々の言語能力に対する自己評価の語りに注目する。自己評価は流動的であり同じ場面のインターアクションであっても時間軸が違えば異なる評価となることもある。しかしその評価の異なりが接触場面向かう管理の一つの証拠ともなる。本研究ノートでも同様に自己評価の語りに注目しながら、彼らのそれまでの言語管理の蓄積を探っていく。

3. 先行研究

3.1 言語とアイデンティティ

最近の言語研究の諸領域では言語とアイデンティティに関して研究が蓄積されているが、多くの研究は、個人のアイデンティティの社会的側面、あるいは対人的な相互行為の側面に集中している(Block 2013)。Erikson (1959)を端緒とする社会心理学的アプローチから距離をおいて、アイデンティティ研究は、ポスト構造主義あるいは構築主義の文脈の中で、アイデンティティをディスコースにおいて構築される現象であるとする立場に立っていると見えよう。したがって、アイデンティティはディスコース上では *subjectivity* ないし *subject position* などとして分析されている(cf. Kramsch 2010).

こうした文脈において、アイデンティティは、自己や相手に対する自己の位置づけである *footing*(Goffman 1981)、あるいは *positioning*(Davies & Harré 1990)といった概念に置き換えられる試みも始まっている。例えば、Harré and Langenhove (2010)は、役割に代わる概念として *positioning* を提出した理由として、「発話行為も含めて、社会的行為が社会的リアリティとして捉えられるならば、人が社会的行為の場所(location)と見なされる新しい出発点

を作ることができる」(訳は稿者, p.107)と述べ、時間や場所に縛られない、ディスコースの実践の中に社会的リアリティを追求すべきことを主張している。つまり、ポスト構造主義的なアイデンティティ研究は、その存在論的な前提としてリアリティを実体論的な古典的理解を否定する上に立っていることを再確認しているわけだ。ディスコース上にアイデンティティを想定する立場からすれば、相互行為の場が現実であり、言語を通してそこで指標されたり構築されたりする、個人の社会的・象徴的な役割こそが、アイデンティティ研究の中心課題になると考えられる。

一方、応用言語学、とりわけ第2言語習得の分野では移民の社会参加とアイデンティティの関わりに注目し、その社会的側面を強調している。例えば、Norton(2000)では、アイデンティティを「世界との関係の理解、時空間を横切った構築の過程、将来の可能性の理解」と定義する。そして、ホスト社会への移民の参加の機会がどのように配分されているか、インターアクションのなかでどのようなアイデンティティが構築されてきたかなどの複雑な関係として第2言語習得を分析する必要があることが指摘されてきた(e.g.Norton 2000;Norton and Toohey 2011)。Norton たちにとって、言語は社会的なアイデンティティ実現のための「投資」の対象として見なされていることがわかる。

3.2 言語的アイデンティティ

言語とアイデンティティの関係は、単にポスト構造主義や構築主義から問題にされてきただけではない。そこには国家＝言語＝宗教という古典的な近代国家モデルを背景として生まれ、言語と共同体とを結びつけてきた近代社会が、グローバル化によって風前の灯火となった現在の社会状況に関連している。近代社会においては、言語的アイデンティティは、共同体に対する忠誠の指標となり、国家に多様な人々を併呑することになったり、また少数言語の共同体の独立を鼓舞する役割を担ってきた。ことばの共同体もモノリンガルが構成する共同体のイメージに沿って作られてきた。グローバル化にともなうグローバルな言語(e.g.英語)とローカルな言語の間の対立といった図式も、ローカルな言語によることばの共同体の危機として主張されるときには、言語的アイデンティティの意味するものは近代社会のそれと大きな違いはないと言えよう。

しかし、人の移動が頻繁に生じる現代の多言語社会を対象とするとき、ホスト社会の人々ですら言語バラエティが差し示す多様な価値に直面して自分たちの言葉をどのように社会に位置づければよいか課題になっていることがわかるだろう。Park (2012)が指摘するように、人々はもはや共同体と言語を自然な関係として扱う以上のことを実践している。例えば、若者たちがそれまで地域的にも言語的にも無関係な言語の一部を取り入れたり(cf. crossing, Rampton 1995)、経済活動上の便宜のみによってある言語バラエティを習得したり(cf.言語のコモディティ化, Cameron 2005)することによって、人々の言語レパートリーそのものが複雑な積み重なりの結果となっている。別な言い方をすれば、言語的アイデンティティは、ことばの共同体から離れて、個人のこれまで接触してきた言語バラエティを、さまざまな価値を指標する資源としてどのように自分の言語レパートリーに位置づけていくかという点から捉え直すことが必要になったと言える。

3.3 ネウストプニー(1989)の類型論的アプローチ

以上のような個人としての言語的アイデンティティは、接触場面に向かう言語管理、すなわち通時的な言語管理の軌道によって蓄積された接触場面に対する方針においてどのように位置づけることができるだろうか。

人々の語りから取り出される接触場面に向かう言語管理のさまざまな方針はレベルが異なると同時に相互に関係している。こうしたレベルの相違が示唆していることは、言語レパートリーとして蓄積される言語資源は、管理の軌道において取り込まれ無秩序に積み上がっているのではなく、開かれた系として柔軟に何らかの階層性によって関連づけられているということだ。

Neustupný (1978), ネウストプニー(1989)は、こうした階層性による関係性を説明するために類型論的アプローチを提唱した。そこでは、相互依存関係にある現象のセットを4つの階層において理解しようとする。4つの階層は、それぞれ決定要因、マキスムまたは原則、ストラテジー、ルールと名付けられており、適用範囲の広さ狭さによって区別されている(村岡 2010)。

例えば、村岡(2016; 2017)で分析された原則とストラテジーには以下のようなものがある。調査協力者はいずれも日本調査によるもので、Lは5年以上、Sは5年以下の在住であることを意味する。

原則の例：

- ・「日本に住む限り日本語学習をすることが不可欠である」(L1-PH)
- ・「ネイティブのレベルに到達するまで日本語の勉強を続ける」(L4-KR)
- ・「ため口は使わない」(L4-KR)
- ・「日本語で話すときは言葉使いに気を遣わない」(L14-IR)

ストラテジーの例：

- ・「間接的な話し方をする」(L2-CH)
- ・「わからない言葉は詮索する」(L14-IR)
- ・「言葉の使い方を観察する」(S3-KR)
- ・「間違っても話す」(S3-KR)

特に原則について見てみると、ここには日本語使用や日本語習得を促進するための広範囲に適用可能な方針が語られていることがわかる。翻って、3.2で触れたように、言語的アイデンティティを、自分の言語レパートリーに言語バラエティをどのように位置づけていくかと捉えるとすれば、これらの原則とは一線を越えた、汎用性の高い思考の階層としてみなしてもよいように思われる。例えば、L14-IRの語りに見られた原則「日本語で話すときは言葉使いに気を遣わない」は、日本語の待遇表現や敬語表現について考慮しないでメッセージの伝達に集中することを述べたものである。この原則は仕事領域でも交友領域、あるいは初対面の場合であっても適用されると考えられたが、本人が言語化できるかどうかにかかわらず、その上位には「必要不可欠な言語資源だけを取り入れる」といった、方針も想定できるかもしれない。原則よりも上の階層を想定するとすれば、そうした方針は

ネウストプニー(1989)の「決定要因」として見なすことが可能になる。

決定要因の階層に位置づけられる言語的アイデンティティは、とくに移動する人々が住むホスト社会の主流言語バラエティが対象である場合、言語に対する基本的な態度として、その言語バラエティをどの範囲でどれだけ取り入れるか、またその言語バラエティにどのように価値づけをしていくかを決定する役割を果たす。原則やストラテジーは緩やかにそうした言語的アイデンティティの基本的な態度に覆われると考えられる。

4. 調査方法と分析の枠組

4.1 調査の概要

本研究ノートは、一連の研究調査の一部であり、調査方法も同じである。本研究ノートで取り上げる日本人1名 S10-JP に対する調査は2017年2月、オーストラリアのメルボルン郊外で行われた。調査は言語バイオグラフィー・インタビュー(Nekvapil 2004, Denzin 1989)とインターアクション・インタビューを90分行った。言語バイオグラフィー・インタビューは、調査協力者が生まれてからどのように言語を習得してきたかを時間軸に沿って語ってもらうものであり、語りの3つの層である、事実レベル、主観レベル、テキスト・レベルのデータが収集出来る。また、インターアクション・インタビューでは最近のコミュニケーションを1日調査の要領で語ってもらうことにより、遭遇したコミュニケーション・イベントとそこでの言語管理を聞き出すことが出来る。さらにインタビューの前後では、準備した質問紙によって言語能力に関する自己評価を問うことも行った。

4.2 調査協力者のプロフィール

言語バイオグラフィーから明らかになった S10-JP のプロフィールをを次に示す。

S10-JP :

1993年	0歳	高知に生まれる
2011年	18歳	京都の大学に入学
2012年	19歳	アメリカの大学に半年の短期留学をする。日本人留学生に英語能力を馬鹿にされ、英語習得と大学院留学を目指すことを誓う。
2013年	20歳	帰国後、2ヶ月、フィリピンに留学し、英語の多様さを経験する。
2016年	23歳	オーストラリアの大学院に留学。

S10-JP は日本の地方都市で生まれ、大学生のときにアメリカへの短期留学を経て、恩師のすすめと志望分野が世界的に有名であったことから、大学卒業後にオーストラリアの大学院に留学している。S10-JP はアメリカ英語の習得に努めた後に、フィリピンの英語などを経験し、その後にオーストラリア英語や移民の英語に接し、オーストラリア英語については理解出来るようにする一方で、習得にそれほど価値を置こうとしないことがインタビューから明らかになった。

4.3 分析の枠組

本稿では、調査協力者の事例について述べていく。

まず言語バイオグラフィー・インタビューからホスト社会の主流言語の使用や能力に関する自己評価を通時的な言語管理の軌道に跡づけ、そこから原則や戦略がどのように語られたかを分析する。今回扱う事例はオーストラリアの主流言語である英語が対象となるが、周知のようにオーストラリアではイギリスの南部やロンドンのコックニーの英語変種に似たオーストラリア英語ⁱⁱⁱが使用されている。また 2016 年現在で海外生まれの移民は総人口の 30% を越えて、とくに都市部では英語の超多様性(Vertovec 2007)が見られる (Australian Bureau of Statistics 2016)。こうした言語環境に接しながらどのように自己評価を行っていたかに注目する。

次に、Norton(2000)が強調する社会参加の側面を社会的ネットワークに注目して概観する。調査協力者は大学生であったり大学院生であったりしたときの経験を語っているため、本稿での社会的ネットワークはおもに交友ネットワークを指す。また言語外の望ましいアイデンティティとして将来の自己イメージについても言及する。

最後に原則の上位階層と考えられる決定要因について論じる。

5. S10-JP の事例

5.1 英語能力の自己評価から見た通時的な言語管理

(1) 英語習得の転機

S10-JP は、大学 2 年の時にアメリカ西海岸の大学に半年留学している。最も英語能力を高める動機となったのは、同じ日本の首都圏の大学からきた日本人留学生たちから受けた否定的評価だった。

例 1

で、行ってみて、実際に、で、そこで自分のすごい悔しい思い出がありまして。やっぱりそんな名門の大学に僕みたいな大学から来てるやつってあんまりなくて、で、やっぱり某有名私立の日本の来てるやつらに(笑)、どこじゃ、それはみたいな感じのことを言われ、よく来れたなど。英語もそんなにつたないのについていうのをすごく言われまして、

ここで対象となっている英語とは、アメリカ西海岸を中心とするグローバル社会の最も序列の高い指標性をともなった英語バラエティの 1 つである。日本人留学生たちは、その規範の内面化の程度に合わせて、相対的に S10-JP の程度が低いことを否定的に評価したと解釈できるだろう。非母語話者同士の接触場面においては当該言語の権威が不在であるために言語ゲスト・言語ホストの関係が成立しにくい(ファン 2006)一方で、非母語話者は、その言語規範が硬直していたり、母語話者よりも評価が厳しくなる場合があることもよく知られている(e.g. Neustupny 1985)。こうした否定的な他者評価を受けて、S10-JP は英語能力を本気で高めることを考え始め、さらには大学院留学の動機のひとつともなった。「何をしたらいいかわからなかった」が、とりあえずディクテーションをしたところ、リスニングの成績が急に上がったという。

(2)多様な英語規範との接触

アメリカ留学から戻った S10-JP は、夏休みの2ヶ月間、フィリピンへの短期留学を行っている。その理由は詳らかではないが、フィリピン語が混ざる英語を経験している。さらにオーストラリアに来た当初、ホームステイをした家族は香港移民であり、家庭では英語ではなく広東語が使われていたこと、同じ家にホームステイをしていた中国人留学生がホームステイ家族とよく話せない英語で行った諍いを眼前で見たことなどによって、自分が異文化で生活していることを実感したという。アメリカ西海岸でも人種的に多様な人々に接触していたが、英語バラエティにそれほどの違いがなかったのに対して、オーストラリアでは英語のバラエティ自体が多様であり、さらに海外生まれの移民の言語がよく聞かれる社会であることが大きな違いとして理解されたと言える。こうした移民による多言語社会との接触は、例2のように、英語規範の多様性に対しても目を開くことになったものと思われる。なお、ER はインタビュアーを指す。

例2

ER：オーストラリア人以外の友人***おつき合いて、何かこういう、当てはまるんですか。

S10-JP：困難を感じたっていうので、コミュニケーションにおいて、やっぱりお互い英語が母国語ではないので、発音だったりイントネーションだったりっていうので理解に苦しむ部分もありますけど、でも、それはそういった意味で、最初は言い回しとかじゃなくても、発音がもう彼らの言語の発音なので、ちょっと理解できないなっていうの、聞き取れないなっていうのは、

(3)オーストラリア英語に対する評価

S10-JP は、オーストラリアの英語バラエティに対して、まず「驚いた」と述べる。

例3

やっぱり何かオーストラリアはオーストラリア独特のオーストラリアンイングリッシュで、一番驚いたのは、グッデイですね、グッデイメイト。何じゃ、それはと(笑)。

ここで例としてあげられたグッデイは、旅行ガイドブックにも掲載されるほどオーストラリアの英語バラエティを象徴的に表す表現である。Good'day は、[eɪ]の二重母音が[ai]へと変化するという発音の相違だけでなく、ポジティブ・ポライトネスによる連帯意識の表明という語用論的な意味もあり、アメリカ英語バラエティには存在しない。

S10-JP はラジオ、テレビを聞いたり、オーストラリア人の友達と話をしたりする中でこの英語バラエティが理解できるように「苦戦」しており、現在でも「全然慣れてないです」と述べている。オーストラリア英語に対する現在の評価については次のような語りがあった。

例4

やっぱりオーストラリアの、やっぱり言語は文化を反映してるもので、例えばグッデイメイトを言ってみたりとか、メイトを使ってみたりとか、そのオーストラリアの方言を使ってみようっていうのは、そういう姿勢は持ってますね。そのほうがやっぱり受け入れられやすいんじゃないかなっていうのはあるので、それはありますね、コミュニケーション取る際は、全然相手がローカルな方じゃなくても、冗談半分っていうか(笑)、ふざけ合いみたいな感じで、

S10-JP にとって、オーストラリアの英語バラエティは、グローバル世界の中ではローカルな変種ではあるが、オーストラリアの大学院で学び、生活をしている限りにおいては使ってみる価値があるものと肯定的に評価していることがわかる。ただし、それは1つには「受け入れられやすい」からであり、もう1つには移民や外国人留学生のつきあいの中で「冗談」として取り入れる程度の価値だとも言える。オーストラリア人の英語バラエティを真似してスタイルをシフトすることによって、そのスタイルを知っていることを示すと同時に、それを外国人の自分が使うことで生まれる違和感が、冗談となるわけだ。

(4)自分の英語使用についての自己評価

日常生活では渡豪2ヶ月で不自由なく過ごせるようになった S10-JP だが、大学院の授業では英語のレベルアップが必要だと自己評価している。

例5

すごいやっぱりみんなできるので、多分クラスでは自分ではできないほうだと思うので、やっぱりこれは、習ってることももちろんですけど、英語のレベルアップっていうのも常にしないといけないと思っています。

例5ではディスカッションが多い授業においてアカデミックな英語能力の不足を否定的に評価したものと思われる。つまり、S10-JP にとっては、オーストラリア英語以上にアカデミックな英語能力の獲得が、習得の目標の1つとして意識されていると言える。

5.2 接触場面向かうストラテジーと原則

(1)ストラテジー「シャドーイング」

S10-JP は以上のような英語能力の自己評価をもとに、その向上のために幾つかのストラテジーを実践している。もっとも習得のための方法として語られたのは、シャドーイングと呼ばれる外国語学習のテクニックであった。

例6

僕はよく独り言で、多分シャドーイングっていうことなんだと思うんですけど、まずは例えば映画とかを見て、あ、そのワンフレーズかっこいいと思ったら、そこ書き留めてるじゃないですか。その書き留めたやつを覚えるんです、ちょっと。ちょっと覚えて、で、ぶつぶつ言っというてみながら、多分、これシャドーイングだと思

うんですね.

(2)原則「メッセージの生成を優先する」

一方で、接触場面に参加するときには、英語のモデルや文法の正しさについては気にしないことを心がけている。つまり、英語の生成における逸脱を留意したとしても評価しない管理¹⁴を行っている。

例 7

ER: じゃあ、対面で英語を使うときってというのは、何か気をつけてることってあるんですか。

S10-JP: ありません。最初に留学に行ったときなんかは文法がどうか発音がどうか時制がどうかってというのはすごく気にしてましたけど、それじゃ一言も出てこないんで、自分の思ったことを、時制がばらばらでも、とりあえずいいやって。説明して、で、それはいつだったの?とか(笑)、それはいつの話?とか言われると、あー、そうそう、前の話とかいう感じで。で、そのあとに正しい文法で指摘を受けたら言い換えるとかっていうのを、(後略)

S10-JP によれば、文法や発音や時制など「とりあえずいいや」と見なし、話した後で聞き返されたり確認要求されたらそこで補足しているという。こうした方針は広く対面場面で適用されており、ストラテジーよりも広い範囲の原則と見なすことができるように思われる。言い換えれば、「メッセージの生成を優先する原則」で多くの接触場面に対応し、その後、意味交渉によってメッセージの伝達を達成することをストラテジーとしていると解釈できる。それにより、対面場面のコミュニケーションが挫折したり消極的になることが防がれているのだと思われる。

この「メッセージの生成を優先する」という原則は、規範的な英語の正確さよりもメッセージの伝達を重視する動機から生まれていると思われる。規範性よりも実際にコミュニケーション行動を優先する態度は、英語を道具として使用しようとするリンガフランクの態度と共通性が認められる(e.g. Krystal 1997)。つまり S10-JP のこの原則は、実際のコミュニケーション行動、それもアカデミック領域における論理的で語彙の豊富な英語バラエティや、ビジネス世界での交渉能力に長けた英語能力によるコミュニケーション行動など、実践的な目標に基づいていると言ってよい。

(3)原則「自分の英語でよい」

さらに S10-JP が語った原則は、「こちらに来て、まあかなり英語は勉強して自信を持ってきたんですけど、やっぱりどうしてもわかんないやって思うことはあって、どうしよう、どうしよう、まあ考えた結果」、「自分の英語で生きていけばよい」というものである。これまで述べてきたように、オーストラリア英語バラエティに苦労し、移民の多様な英語バラエティに接触し、言語学の授業では国際共通語としての英語という概念を習うなど、英語規範が1つではないことを理解していくなかで、特にアクセントやイントネーションに

関してはインナー・サークル(Kachru 1982)の英語を規範としなくてもよいという態度を自覚するようになったものと思われる。そうした原則を持つに至ったのにはオーストラリア社会の条件もあったことを S10-JP は次のように述べている。

例 8

そう。いろんな英語を使ってるんで、すごく、ある意味で、まあ言語的には順応しづらい環境かなと思います。でも、その反面、いろんな英語の一つとして認めてもらえるのはオーストラリアのほうではないかなっていうのも思います。

S10-JP によれば、アメリカと違って、オーストラリアの英語の多様性に直面するとどの英語バラエティを目標に適応していくべきかが難しいが、逆に、その多様性を認めてもらえる社会であると述べている。そのため、「ジャパニーズ・アクセント」でも「通じればいい」と考えるに至ったという。

原則やストラテジーは、通時的に接触場面での管理の蓄積から形成されたと考えられるが、経験される接触場面が人によって異なるにもかかわらず、これまでの研究のなかでは類似の原則の語りが見つかることがあった。つまり、類似した原則が、個々の人々の接触経験の違いにもかかわらず、形成されるとすれば、それは個々の接触経験を越えた社会経済的な要因やグローバル化時代の言語間の序列に対する評価などが間接的に影響を与えているとも考えられる。ここでは紙面の都合で詳述出来ないが、S10-JP の「自分の英語で生きていけばよい」という原則は、他の移動する人々もまた語ることにある原則であると言える。S10-JP によれば、上で述べた以外にも、英語を勉強しつづけてもまだ分からないことが残る以上、自分の英語でもよいのだと思うに至ったと述べており、最上の選択ではないにしても、「自分の英語」を将来に向けて最も可能性のあるバラエティとして見なそうとしていると解釈できる。

5.3 社会的ネットワークへの参加

Norton(2000)が対象とした 5 人の移民女性と異なり、S10-JP が英語で参加する機会が構造的に狭められているとは言えない。生活者と違って、留学生の場合には制度的に授業に参加し発言することが期待されており、S10-JP の語りから権力関係の存在は確認できなかった。

ただし、進学したキャンパスにはアジアを中心とした留学生が溢れており、ローカルのオーストラリア人と知り合うのが難しかったという。そこで S10-JP は意識的に高校時代にやっていたサッカーを思い出してサークルに入ったり、日本語を学んでいるオーストラリア人学生のサークルに顔を出すことで、英語母語話者のネットワークを作り上げていった。こうした意識的なネットワーク作りは、アメリカ留学のときにも経験があった。S10-JP は、アニメ好きの学生が多かったので、それまで見ていなかったアニメを意識して見るようにして話題に参加できるようにすると、ネットワークが「本当にばーってつながった」と述べている。

S10-JP は、以上のようなネットワーク作りをストラテジーとして使うことで、交友ネット

トワークを発展させることが出来、順調にオーストラリア英語の理解にもつなげていったと言えるだろう。

5.4 決定要因：英語非母語話者から英語使用者へのシフト

以上のように、S10-JP はアメリカ留学後にオーストラリアの大学院に進学し、多言語社会の言語環境に取り巻かれると同時に、オーストラリアの英語バラエティにも直面しながら、自分のアカデミックな英語能力を高める努力をしている。また、S10-JP によれば、大学院卒業後に日本の企業に就職し、海外との交渉に従事することを目標としている。

ネウストプニー(1989:301)によれば、原則の上位階層である決定要因は、もっとも一般的な原理であり、「たとえば、特定の生産様式や決定的に重要な経済的ないし地理的な要素」などを例としてあげている。

S10-JP が置かれているグローバルな位置からすれば、彼の英語は拡大サークルを出自とするバラエティとして位置づけられ、しかも日本企業に勤め、グローバル化した経済活動に身を投じようとしている。グローバル化という経済的、社会的な要素は確かに決定要因として想定することができる。

では、S10-JP の英語に対する言語的アイデンティティをどのように考えればよいだろうか。どのように自分の言語レパートリーの中に英語バラエティを位置づけようとしているのだろうか。

アメリカ英語のバラエティに対しては、グローバル化の代表的な中心地の1つであり、言語間序列(Blommaert 2010)の最も高い地位に在ることはアメリカ留学時代に経験していたが、例9に見るように相対的な位置付けをしているように思われる。オーストラリアの英語バラエティについては理解できればよいというように、習得すべき言語規範のモデルとしては位置付けられていない。それはわかると付き合いやすくなるものであり、冗談で使ってみるものであった。また、海外出身の移民や留学生の英語バラエティも、理解が難しいことがあると同時にそれらもまた英語であることについて理解をしていると思われる。

S10-JP は、アメリカ英語にしるオーストラリア英語にしる、インナー・サークル(Kachru 1982)の母語話者の英語規範を、非母語話者の立場から、望ましい言語的アイデンティティとみなすことから離れ、最も外側に位置する拡大サークルとして見なされる日本人の英語に価値を見いだしているように思われる。ファン(2017:75)は、母語話者—非母語話者の概念が、近代国家の「国家＝国民＝言語」という枠組を前提とした言語イデオロギーと関連していることを指摘して、概念がすでに限界にきていることを述べている

非母語話者としてではないということは、自分自身を英語バラエティの1つのタイプを持った英語使用者として見なすことを意味する。S10-JP の2つの原則の上の階層には、インナー・サークルの英語バラエティの非母語話者からあるバラエティの英語使用者への態度のシフトが決定要因として生じていたと解釈できるのではないだろうか。

S10-JP の語りは自分自身の接触場面の管理から生まれた authentic なものであることに疑いはない。しかし、原則のところでも述べたように、S10-JP の「メッセージの生成を優先する」原則はリンガフランカの道具としての英語の態度に類似している。そして、「自分の英語でいい」という原則は、世界英語(World Englishes)の主張するところにもつながっている。

ただし、アウター・サークルと関連の深い世界英語の主張と異なるのは、S10-JP がインタビューのべつなところで次のように述べている点である。

例 9

映画をやっぱり、もうアメリカンイングリッシュだろうがブリティッシュイングリッシュだろうが何であろうが見るっていうことと、今、YouTube を使って結構英語のネイティブの方とかが、レッスンではないですけど、英会話レッスンみたいなことをやられているので、それを見たりとかっていうので補おうとはしてます。

注意しなければならないのは、S10-JP がイギリス英語かアメリカ英語かといった英語規範に関心をもっているのではないということである。英語の用法や表現を習得して、拡大サークルを出自とする自分の英語をさらに高めて、英語使用者となれるように投資(Norton 2000)をしていると考えなければならない。

Honna (2005)は、アジアにおいて、また国際言語としての英語を採用する国々における英語使用に対する態度を分析して、英語の多様性のおおもとには、それぞれの社会に適応させた多文化言語(multicultural language)として、英語が見なされていることを指摘している。S10-JP の態度もまた、こうした英語の多様性を自己確認していくグローバル化の思潮と無関係ではないはずである。

6. 残された課題

本研究ノートでは、ネウストプニー(1989)の類型論的アプローチを参考に、個人が自分の言語レパートリーにある言語バラエティをどのように位置づけ、価値づけていくかを言語的アイデンティティとみなし、それを類型論の最上層である決定要因の1つとして解釈することを試みた。ただし、分析はオーストラリア在住の日本人1名の事例であり、理論として提唱するにはほど遠い。本研究ノートを試論とした所以である。残された課題は多い。とくに決定要因は、Neustupný (1989)でも経済的基盤、生産様式、あるいは個人主義など個人を超えたレベルを想定していたが、個人の言語的アイデンティティとして考えた今回の試論でも世界英語やリングフランカなど、言語イデオロギーとの関連性がうかがえる。事例の分析を増やし、検討していきたい。

注

ⁱ 本稿のもとになった調査は、JSPS 科学研究費補助金基盤研究(C)(代表者村岡英裕、課題番号26370474)から助成を受けている。

ⁱⁱ ただし、プロダクトとプロセスの両方を対象としたものとして、在日一世コリアンについては金(2003)、ニューカマーの中国人については鄒(2014)の重要な研究成果も上がっている。

ⁱⁱⁱ オーストラリア英語については、特に発音と語彙がアメリカ英語と異なり、イギリス英語に近いことが知られている。アクセントについては Cultivated, General, Broad という3つのバリエーションが多くの人々に共有されているが、年々、移民の増加ということもあり、Generalが増加している傾向にある(Mitchell and Delbridge 1965, Romain 2004, 津熊 2007)。また、語彙については、川島(笹原)(2015)などに簡明な例が掲載されている。

^{iv} 言語管理理論(Neustupný 1994)では、規範からの逸脱、逸脱の留意、評価、調整計画、実施という5段階で言語に対する行動を説明しようとする。ここでは、逸脱の留意はしたが、評価の段階では評価無しという処理をしたことを指す。

参考文献

- Australian Bureau of Statistics. (2016). [http://www.censusdata.abs.gov.au/CensusOutput/copsub2016.nsf/All%20docs%20by%20catNo/Data-in-pictures/\\$FILE/australiaER.html](http://www.censusdata.abs.gov.au/CensusOutput/copsub2016.nsf/All%20docs%20by%20catNo/Data-in-pictures/$FILE/australiaER.html) [閲覧 2018.2.28]
- Block, D. (2013). Issues in language and identity research in applied linguistics. *ELIA* 13, pp.11-46.
- Blommaert, J. (2010). *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cameron, D. (2005). Communication and commodification: Global economic change in sociolinguistic perspective. In G. Erreygers (Ed.), *Language, Communication, and the Economy*, pp. 9-23. Amsterdam: John Benjamins.
- Davies, B., and Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*. 20. pp.43-63.
- Denzin, N.K. (1989). *Interpretive Biography*. Newbury Park, CA: Lomdom; and New Delhi: Sage.
- Erikson, E.H. (1959). *Psychological Issues : Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木啓吾訳編(1973). 自我同一性 誠信書房)
- フェアブラザー, L (2002).相手言語接触場面における日本語母語話者の規範適用メカニズム 接触場面における言語管理プロセスについて 千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 第38集 pp.1-12
- ファン, S.K.(2006).接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 国立国語研究所編 日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性— アルク pp.120-141
- Fan, S. K. (2015). Accustomed language management in contact situations between Cantonese speaking Hong Kong employers and their Filipino domestic helpers: A focus on norm selection. *Slovo a slovesnost*. 76(2). pp.83-106.
- ファン, S.K.(2017).外国語使用のバリエーション—「母語・非母語」を越えた言語行動の多様性 ことばと文字 8 pp.73-83 日本のローマ字社
- Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gumperz, J.(1964). Linguistic and social interaction in two countries. *American Anthropologist*. 66. pp.137-154.
- Harré, R. and Langenhove, L.V. (2010). Varieties of positioning. In Langenhove, L.V. (ed.), *People and Societies: Rom Harré and Designing the Social Sciences*. London and New York:Routledge. pp.106-120.
- Honna, Nobuyuki. (2005). English as a multicultural language in Asia and intercultural literacy. *Intercultural Communication Studies* XIV:2, pp.73-89.
- Hymes, Dell (1972). Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, John, & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in sociolinguistics. Ei0* pp.35-71. New York: Holt, Rinehart & Winston.

- Kachru, B.B. (1982). *The Other Tongue: English Across Cultures*. Urbana, Ill: University of Illinois Press.
- 川島(笹原)志保美(2015).英語モジュールにみる内部圏の英語変種における語彙の相違 (特集 英語モジュールと社会言語学的変異研究) *Global Communication Studies=グローバル・コミュニケーション研究* 2 pp.43-56
- 金美善(2003).混じり合う言葉—在日コリアン 1 世の混用コードについて *言語* Vol.32(6) pp.46-52 大修館書店
- 高民定(2014).日本の韓国人移民の言語習慣に向かう評価—語りに見られる言語習慣の通時的管理との関わりから 接触場面における言語使用と言語態度—接触場面の言語管理研究 vol.11 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 278 集 pp.131-144
- Kramersch, C. (2010). *The Multilingual Subject: What Foreign Language Learners Say About Their Experience and Why it Matters*. Oxford: Oxford University Press.
- Krystal, D. (1997). *English As A Global Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Michelle, A.G. and Delbridge, A. (1965). *The speech of Australian adolescents: A survey*. Sydney: Angus & Robertson.
- 村岡英裕 (2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか: 類型論的アプローチについて 村岡英裕(編)接触場面の変容と言語管理—接触場面の言語管理研 vol.8 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 (228) pp.47-59
- 村岡英裕(2016). 言語使用の評価を通してみる習慣化された言語管理の軌道—言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性をめぐって— *グローバル・コミュニケーション研究* 4号 (特別号) pp.141-168 神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所
- 村岡英裕・高民定(2016).日本在住の移動する人々の言語使用意識—留学生の滞在期間と言語習慣に焦点を当てて— *jkask* vol.21(3) pp.219-241
[http://www.jkals.or.kr/html/sub3_01.html?pageNm=article&code=291410&Page=8&year=&issue=&searchType=&searchValue=&journal=1]
- 村岡英裕(2017). 移動する人々の言語レパトリーに関する研究ノート—日本語の自己評価の語りはどのように構築されているか— 接触場面における儀礼的相互行為: 接触場面の言語管理研究 Vol.14 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書(309) pp.62-82
- 村岡英裕・倉田尚美(2017).日豪における移動する人々の言語レパトリー調査 —社会ネットワークへの参加の文脈に焦点を当てて— 第 39 回社会言語科学学会大会予稿集 pp.66-69 社会言語科学会
- Nekvapil, J. (2004) *Language biographies and management Summaries*. 接触場面の言語管理研究 vol.3 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 pp.9-33
- Neustupný, J.V. (1978) *Post-Structural Approaches to Languages: Language Theory in a Japanese*

- Context*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Neustupný, J.V. (1985) Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (ed.) *Australia, meeting place of languages*. pp.161-170. Pacific Linguistics.
- ネウストプニー, J. V. (1989). 日本研究のパラダイム: その多様性を理解するために 世界の中の日本 vol.1 pp.79-96 国際日本文化研究センター
- Neustupný, J.V. (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (ed.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution*. pp.50-69, Singapore: Academic Press.
- Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. Essex, UK: Pearson Education Limited.
- Norton, B., and Toohey, K. (2011). Identity, language learning, and social change. *Language Teaching*. 44(4). pp.412-446.
- Park, J.S-Y. (2012). Linguistic identities. In Juergensmeyer, M. and Anheier (eds.), *The Encyclopedia of Global Studies*. pp.1080-1084. Thousand Oaks: Sage.
- Rampton, B. (1995). *Crossing: Language and Ethnicity among Adolescents*. London: Longman.
- Romaine, S. (ed.), (2004). *Language in Australia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 鄒曉依(2014).接触場面における動詞語彙の使用及び管理のバリエーション 中国人居住者の事例から 接触場面における言語使用と言語態度 接触場面の言語管理研究 vol.11 千葉大学大学院人文社会科学部研究プロジェクト報告書 第278集 pp.1-19
- 津熊良政(2007).オーストラリア英語アクセント—豪英語特徴についての一考察— 立命館言語文化研究 20(4) pp.107-138
- Vertovec, S. (2007). Super-diversity and its implication. *Ethnic and Racial Studies*. 30 (6). pp.1024-1054